

西教寺慧海潮音と富永仲基

小 泉 博 明*

【要旨】西教寺の慧海潮音に『摺裂邪網編』がある。これは大乘非仏説を主張した富永仲基の『出定後語』を反駁した著作である。大坂懷徳堂出身の仲基が、加上説に立ち『出定後語』を上梓した。仲基の加上説は、思想の優劣判定や信仰とは無縁な文献の歴史的研究の方法であったが、仏教界からの反駁や、国学者への影響などがあった。本稿では、潮音と仲基を中心に、近世仏教の思想の一面を考察した。

1. 西教寺の慧海潮音

慧海潮音^{えかいちようおん}(1783～1836)は、浄土真宗本願寺派涅槃山西教寺(現東京都文京区向丘2-1-10)の第8代住持であり、江戸後期を代表する学匠で、代表作に『摺裂邪網編^{かくれつじやもうへん}』がある。これは、大乘非仏説を主張した富永仲基の『出定後語^{しゅつじやうこうご}』を反駁した著作である。

西教寺の縁起は、常州那珂郡村松(現茨城県東海村)に住んでいた村松行武が親鸞の弟子となり、慈専坊と称し、一字を建立したところから始まる。1630(寛永7)年に了賢(村松茂武)が江戸湯島の金助町に移り一寺を建立したが、1657(明暦3)年の火災による被害から、了賢の子、誓玄の時に現地に移った。¹⁾

慧海潮音は、「天明三年に江戸四谷の酒屋に生まれ、後に西教寺の養子となる。第七代能化智洞(1736～1804)に真宗学を、江戸寛永寺の慧澄(1780～1862)に天台学を学ぶ。西教寺住職となりその傍ら儒学・神道を講究した。天保六年(1835)には五機内を歴遊して内外の学匠と交流し漢詩文の贈答をした。その翌年正月一日、西教寺にて寂した)」²⁾とあり、中興開山した。

なお、西教寺表門(赤門³⁾・文京区有形文化財指定)は、1874(明治7)年に徳川家の譜代大名酒井雅楽頭家の江戸上屋敷(現在の大手町)より移築したもので、酒井雅楽頭家13代、第5代姫路藩主酒井忠学^{ただのり}の正室として嫁いだ喜代姫(1818～1868)を迎えるために建立した。喜代姫は、11代将軍徳川家斉の25女で、12代将軍家慶の異母妹に当たる。⁴⁾

2. 大坂懷徳堂の富永仲基

東洋史学の泰斗である内藤湖南は「先学の言によれば、徳川三百年間、毛すじほども他人に頼らずに、段々乎々たる独創的新見解の説を作りあげたのは、富永仲基の『出定後語』、三浦梅園の『三語』、山片蟠桃の『夢の代』三つの書物がそうであるだけだ」⁵⁾という。

小説家の司馬遼太郎は、富永仲基(1715～1746)について「独創的だったのは、大坂の道明寺

* 教授／日本思想

屋という醤油問屋の息子の富永仲基だった。(略)仲基は、仏教という夾雑物の多い思想を人文科学的な冷静な態度で洗い込み、ついに、日本が珍重してきた法華経や阿弥陀経などをふくむ大乘仏教というのは釈迦の教説ではなく、釈迦以後五百年たってだれかが創作したものとした(『出定後語』)。かれの作業は、副効果として、仏教ぎらいの国学者(本居宣長など)をよろこばせた⁶⁾と簡潔に要諦をいう。

懷徳堂は1724(享保9)年に、大坂に設立された町人出資の学校である。五同志と称される豪商三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、舟橋屋四郎右衛門、肥前屋吉兵衛、鴻池屋又四郎が、三宅石庵(1665～1730)を学主に迎えて、船場尼崎町(現大阪市中央区今橋3丁目)の道明寺屋の隠宅で開校した。1726(享保11)年には私塾から、将軍徳川吉宗の学問奨励により官許を受けて半官立となった。

富永仲基は、醤油醸造業を営む道明寺屋吉左衛門こと富永芳春の三男である。仲基の初名は德基といったが、20歳過ぎてから仲基と改めた。伝説によれば、『説蔽』(現在、散逸)という書を著し、先秦諸家思想を成立論的に批判し、父が懷徳堂創設者の一人であるにもかかわらず、師の不興を買い、破門されたという。石庵は1730年に没しているので、仲基16歳までの事と推察される。⁷⁾ 石庵の没後は、摂津池田に隠棲していた儒者田中桐江に就学し、桐江の呉江社に加盟した。また、黄檗版大蔵経刊行のため、校合に従事していたという伝記もある。⁸⁾ しかし、鉄眼が開板した『一切経』は、1681年に刻蔵が完了しているので、残務処理という仕事を勸案しても、信憑性は極めて薄い。父芳春の没後は、分家して独立し、母とともに生活し、町儒者として弟子をとることになった。仲基はいくつかの著書を上梓し、盛名が漸く世に知られるに至ったが、年来の持病が悪化し、主著である『翁の文』(1738)、『出定後語』(1745)を出版し、1746(寛保6)年に32歳を以て夭逝した。墓は大坂の浄土宗西照寺(現大阪市天王寺区下寺町2-2-45)⁹⁾にある。

懷徳堂出身の町人学者には、『夢の代』で無鬼論を説いた山片蟠桃がいる。経済的に発展した商都大坂の風土が、卓抜なる思想、町人文化を醸成したともいえる。加藤周一は、仲基について「支配階級である武士のイデオロギー、すなわち一方では仏教と手を携え、また他方では神道と融合した儒教に対し、それを根底から覆そうとする入念かつ本格的な知的努力において、町人精神を明快に表現したのであり、そしてそのことは決して偶然ではなかった」¹⁰⁾という。まさに仲基は町人精神を体現し発揮したのであった。

3.『出定後語』とその反響

3-0. 近世の排仏論

近世の排仏論は、儒学者と国学者のものと大別される。近世末期になると、キリスト教がこれに加わる。儒学者の排仏論の中には、経世論の立場での仏教有害論がある。そして、後半期の儒学者になると科学的な立場での仏教批判がある。その中に歴史学的な側面からの批判がある。それが仲基の大乘非仏説である。¹¹⁾ 僧侶が庶民に説教した大乘經典が、釈迦が語ったも

のではないと言うのである。

3-1. 『出定後語』

仲基は『出定後語』で、大乘非仏説を提唱した。それ以前は、大乘經典は、冒頭に「如是我聞」と言うように、釈迦の教説（金口^{こんく}）を「我」である阿難（阿難陀・アーナンダ）が直接に聴聞し、すべての經典（一切經）は歴史的な釈迦の金口による直説とされていた。しかし、仲基が大乘仏教は釈迦が説いたものではなく、歴史的に順に成立したとした。今までの仏教教団の教理の土台であり、その「常識」を根底から覆す仲基の画期的な提唱に対し、仏教界にどのような衝撃が走ったか想像に難くない。

では、どのように諸經典を整理分類したのだろうか。教相判釈（教判）により、諸經典を「釈尊の一生涯に説かれたものとして、それらの説かれた形式・方法・順序、説かれた意味内容や教義内容などによって、諸經典を分類し、体系づけ、価値を決めて、仏の真の意図」¹²⁾を明らかにし、各宗派の優位を位置づける拠り所としたのである。

天台宗の智顗^{ちぎ}が説いた「五時八教」がある。「五時」とは、仏教の經典を歴史的な展開とせずに、釈迦の一生涯の中で配置して次のように解釈する。

「第一時－華嚴時。ブッダは悟りを開いた最初に『華嚴經』を説いたとされる。（略）」

第二時－鹿苑時。（略）鹿苑というのはブッダが初めて説法を行った鹿野苑のことで、具体的には阿含經典を指す。

第三時－方等時。方等經というのは、大部分大乘經典のことで、（略）主として『維摩經』などが考えられ（略）

第四時－般若時。「空」を説く般若經典。（略）

第五時－法華・涅槃時。ブッダが生涯の最後に説いたのが『法華經』と『涅槃經』であるとされる。それまでのブッダの説法はすべて方便であり、『法華經』こそ真実の教えを説いたものだといわれる。（略）」¹³⁾

従って、教相判釈により天台宗においては『法華經』が至上の經典となるのである。また、「五時」を牛乳の精製で乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の「五味」に譬えると、「五時」は最高の美味である醍醐味に当たる。

仲基が大乘非仏説を基礎付ける理論が加上説であり、文献の歴史的研究の方法である。要するに「時代的に後から出てくる説は、それに先立つ説に何らかの新しいことを付け加えることによって、自己の優越性を示そうとする」¹⁴⁾という考え方である。逆にいえば「新しいことが付け加わっている文献は、それがないものよりも時代的に新しい成立だということ」¹⁵⁾になる。

なお『翁の文』では「おほよそ古より道をとき法をはじむるもの、必ずそのかこつけて祖とするとところありて、我より先にたてる者の上を出んとするが、その定りたるならわしにて、後の人は皆これをしらずして迷ふことをなせり」¹⁶⁾という。

さらに『翁の文』で、『出定後語』の趣旨を次のようにいう。

釈迦の佛法にも、文殊の徒が般若^{とものがら}の大乘をつくりて、空をときたるは、迦葉の輩の阿含を

つくりて有^うをときたる、その上を出たるものなり。普賢の徒の法華深密などを作り、不空実相をときて、それを成道^{じょうどう}四十餘年の後の説法にかごつけたるは、また文殊の説の空の上を出たるものなり。其次に華嚴をつくりたるものゝ、成道二七日の説法にかごつけて、日輪のまづ諸大山王を照すにたとへたるは、又これを成道^{はじめ}の始にかごつけて、諸法の上を出たるものなり。其次に涅槃^{ちやうや}をつくりたるものゝ、涅槃一晝夜の説法にかごつけて、醍醐の牛乳より出るにたとへたるは、諸法を合せて其上を出たるものなり。又金剛薩埵の大日如来にかごつけて、法華を第八、華嚴を第九とたて、釈迦の説法を皆顯教と名付たるは、是は諸法をはなれて又其上の上を出たるもの也。又頓部^{とんぶ}の經の、一切煩惱、本来^{もづかはなる}自離、一念不生、即是成佛などいひ、又禪宗に四十餘年所説の經卷は、みな不淨を拭ふ破れ紙などいひ出たるは、これは諸法を破りて、又其上の上を出たるものなり。是をしらずして、菩提留支^{ぼだいりうし}は、釈迦の一音、色いろにきこゑたるなりといひ、又天台は、釈迦の方便^{つたふ}にて、一代の中に、説法が五度かはりたるといひ、又賢首は、衆生の根機にしたがひて、其傳る所おのゝことなり心得られたるは、共に大^{おお}なるとりそこなひのひがみたる事どもなり。此始末をしらしむとおもはず、出定といふ文を見るべし。¹⁷⁾

註釈によれば、「華嚴經を作ったものが、仏が悟りをひらいてから直ちに、十四日の間に説いた大乘終極の教が華嚴經だとし、それはあたかも太陽が始めて出た時、高い山だけが照らされて、低い山や谷間には光がおよばないように、普賢・文殊等の諸菩薩のみは理解できたが、舍利弗以下の根機のない者は理解できなかったとする。涅槃經は、法華經を説き終わった仏が入滅する直前に法華の教の悟りに漏れた未熟な者の為に説いた」¹⁸⁾という。なお、頓部の經とは主に禪宗の教えを指し、菩提留支とは、維摩經のことである。

仲基の大乘非仏説は、自らの加上説を仏典に応用した結果なのであり、排仏論を意図したものではなく、ましてや思想の優劣判定や信仰とは無縁なものである。なお仲基は『出定後語』(第二十四章)では「吾は儒の子に非ず、道の子に非ず、亦仏の子に非ず」と言い、儒仏道の三教に依存せぬ、相對主義的倫理觀とも言うべき「誠の道」を説いた。

しかし、仲基本人の意図が曲解され、排仏論の系譜に入っているが、仏教徒からの反駁、国学者からの排仏論への手段(賞賛)へと利用され波紋が広がり、科学と宗教(信仰)との対峙となったのである。安藤昌益が「忘れられた思想家」と称されるならば、仲基は本人の意図とは別次元で議論された「歪められた思想家」とも言えよう。内藤湖南によれば「浄土宗の坊さんの書いた『大日比三師講説集』という本がありまして、富永は仏教の悪口を言うたのでとうとう癪病になった。それからたいへん後悔して、坊さんに頼んで、『出定後語』の版木を焼き棄て、『阿弥陀經』千巻を書いて懺悔したけれどもなんら験がなく、とうとう癪病で死んだ」¹⁹⁾という。このように、仲基は「仏罰」を受け、『出定後語』の版木を焼き棄てたが、ハンセン病で死亡したという話に仕立てられるほど、反駁されたのであった。

3-2. 仏教への影響

仏教側からは、『出定後語』を排仏論とみなし、強烈な反駁を加え論破し、論難しようとする

る護法論が展開された。

無相文雄^{む そうぶんゆう}（1700～63）は、「丹波国桑田郡の人。出家して浄土宗の僧となり京都にいたが、江戸に下り、太宰春台について儒学と中国語を学び、27歳で京都に帰り、了蓮寺の住職となった。『磨光韻鏡』その他の著書によって、わが国に伝わった漢字音と唐音との間の一貫した法則を明らかにした」²⁰⁾という。仲基の『出定後語』に対し、無相文雄は『非出定後語』を著し反駁した。その序文で大乘非仏説に対し、巻頭で次のように言う。

嗚々小知齷々、螻蛄不知春秋也。^{けい こ}21) 亦為可憐。大氏不信釈典、与古今儒士所腐論相同。

一二易言爾、豈謂之奇論乎。(略)狂而乱。仲基可謂狂士。²²⁾

(嗚々小知齷々、螻蛄春秋ヲ知ラザル也。亦憐ムベキト為ス。大氏釈典ヲ信ゼザルコト、古今儒士ノ腐論スル所ト相同。一二其言易ルコト爾り、豈之ヲ奇論ト謂フ乎。(略)狂ニシテ乱。仲基狂士ト謂フベキカ。)(筆者書き下し)

仲基の加上説を単なる「腐論」と見なし、さらに仲基を「狂士」とまで非難し、従来の仏教教学の立場を墨守している。ただし、仲基の用いている語句や表現の誤り、不正確な点を論難している。

慧海潮音は『摺裂邪網編』（『弾出定後語』）を著した。略歴は冒頭に記した通りである。内藤湖南は「真宗の慧海潮音という人がありまして、これは江戸の浅草で生まれた坊さんであります。真宗の坊さんとしてはよほど不思議な人でありまして、真宗でありながら戒律を守って肉食妻帯もしなかった坊さんで、有名な真宗の学者であります、この人がまた『出定後語』を反駁した本を作りました。なかなかむつかしい名前の本であります、『摺裂邪網編』（1819）という、これも二巻ありまして、いろいろ反駁してあります。もちろん多少富永の誤りをただすだけのことはありますが、しかし富永の根本学説に触れたようなことはありませぬ。とにかく今日まで富永の著述というものは、仏教研究の著述としては非常な立派なもの」²³⁾ですという。

『摺裂邪網編』の凡例では次のようにいう。

一、此書以一大佛教為宗。以護大法城為趣。當來和合海中諸兄弟。読此書者。破邪見殘党。為如来孝子順孫。固所願也。²⁴⁾

(此ノ書一大佛教ヲ以テ宗ト為ス。大法城ノ護ヲ以テ趣ト為ス。當來和合海中ノ諸兄弟。此書ヲ読ム者。邪ノ見殘党ヲ破テ。如来孝子順孫ト為ス。固ヨリ願フ所也。)(筆者書き下し) 題言では、次のようにいう。

仏教分為一十餘流。各憑金口。建立施設。(略)邪人富永仲基。未究其意。更有多劫宿罪。(略) 仏有応病與藥大悲、衆生存機感不同流類、豈無諸經多義語、諸師判教哉。²⁵⁾

(仏教分テ一十餘流ト為ル。各金口ニ憑テ。建立施設ス、(略)邪人富永仲基。未ダ其意ヲ究メ。更ニ多劫ノ宿罪有テ。(略)仏ニ応病與藥ノ大悲有リ、衆生ニ機感不同ノ流類ヲ存ス、豈ニ諸經ノ多義諸師ノ判教無ンヤ哉。)(筆者書き下し)

さらに、例えば次ように大乘非仏説を批判する。

後世學者。不知之。皆徒以謂。數萬經說。皆阿難所集。吁亦何愚也乃至其實阿難所集。則

纔阿含数章已。

破曰。知小乗結集。不知大乘結集。漫疑大乘。是汝膏肓之疾也。大小二乗。本来一具佛法。小乗真。則大乘亦真。大乘真。則小乗亦真。大小二乗不離之義。如前所明。²⁶⁾

(後世ノ學者。之ヲ知ラズ。皆徒ニ以謂ラク。数万ノ經說。皆阿難ノ集ル所ト。吁亦タ何ソ愚ナル也乃至其ノ実ハ阿難ノ集ル所。則チ纔ニ阿含数章^{わずか}ノミ。

破曰。小乗ノ結集ヲ知テ。大乘ノ結集ヲ知ラズ。漫ニ大乘ヲ疑フ。是レ汝カ膏肓ノ疾也。大小二乗。本来一具ノ佛法。小乗真ナラバ。則チ大乘亦タ真。大乘真ナラバ。則チ小乗亦タ真。大小二乗不離ノ義。前ニ明ス所ノ如シ。)(筆者書き下し)

さらに、次のようにいう。

汝所説出定經典。實是出情狂顛也。嗚呼欲壓古今之邪心。徒為南柯一夢。豈不蟻壞哉。²⁷⁾

(汝カ説ク所出定經典。實ニ是レ出情狂顛也。嗚呼古今ヲ壓ント欲之邪心。徒ニ南柯ノ一夢ト為ル。豈ニ蟻壞ニザラン哉。)(筆者書き下し)

ここでは、潮音は『出定後語』を「出定經典」ではなく、「出情狂顛」とまで言い、南柯の夢に過ぎないと切り捨てている。この一例のごとくに、潮音はひたすら仏教の護法論の立場に終始し、大乘非仏説についての歴史的な立場の理解はなく、大乘仏説論を既定の事実として、従来の対機説法により諸經典に相違があるというのみである。

3-3. 国学への影響

司馬遼太郎がいう「副効果として、仏教ぎらいの国学者(本居宣長など)をよろこばせた」とは、本居宣長『玉勝間』の「出定後語といふふみ」にある。

ちかきよ大坂に、富永仲基といへし人有、延享のころ、出定後語といふふみをあらはして、仏の道を論へる、皆かの道の經論などいふ書どもを、ひろく引出て、くはしく証したる、見るにめさむるこちする事共おほし、(略)そののち無相といいしほうしの、非出定といふ書をあらはして、此出定をやぶりとたれど、そはただおのが道を、たやすくいへることを壓壓にくみて、ひたぶるに大声を出してののしりたるのみにて、一くだりだに、よく破りえたることは見えず、むげにいふかひなき物也²⁸⁾

宣長は、仲基の『出定後語』に対し「見るにめさむるこちする」と礼賛し、無相文雄の『非出定後語』については「むげにいふかひなき物」と斬り捨て、反駁たりえないとする。

さらに、平田篤胤は『出定笑語』(別名『仏道大意』・1849)を著した。

桜町の天皇の御代しろしめす寛保延享の間に當りて、津国難波に富永仲基と申す人会あつて(略)それより進んで仏書をよみ、かの不凡の玄才を以て仏法の經論のこらず読尽し、唐大和の儒学者はもとより彼釈迦の生国その仏法の本国嫡々相承の祖師開祖と仰がる、名僧知識も、かつてみとらず考出さぬところの明説を云いだし、諸仏經は、一部一冊として釈迦の真經でなく後世の偽さくなるよしをはつめいして、名さへ出定後語といふ書二まきあらはして²⁹⁾

そして、篤胤は仏教教理を換骨奪胎して、その教義を構築していった。

さらに篤胤の『出定笑語』に対し、幕末の浄土真宗東本願寺派の竜温(1800～85)は『総斥排そうせきはい仏弁ぶつべん』(1865)を著した。その内容は「排仏論家と目される儒学者・国学者・経世論者や、幕末に輸入された漢訳のキリスト教教理書、西洋天文学書などを反駁し、仏教とくに真宗僧侶の奮起を促したもの」³⁰⁾である。とくに、儒者の仲基を排仏の魁たる者として捉え、護法論を展開している。

最も悪ムベキハ、富永ガ出定後語二卷、(略)本ト大坂ノ町人デ、道明寺屋ノ吉右衛門ト云。本ヨリ勝タルオアリテ、ソノ時名高キ三宅万年ト云儒者ノ門人トナリ、三年を経ル間ニ、コノ儒ハ吾日本ニ害アリト云ニ出シ、説弊ト云モノヲ作りテ、万年ニミセタコロ、万年大ニ怒リテ、忽ニ破門スル。ソレヨリ仏書ヲヨミカケテ、ツイニ黄檗山ニ入りテ、一切経ノ板ヲ摺リ、仏家ノ飯ヲモテ命ヲツナギ、判ヲスリスリ、一切経ヲヨミ、出定後語ヲ作りテ大イニ仏法ヲ破ス。(略)浪華ハ本ヨリ仏法有縁ノ地ユヘニ、誰用ユル者モナク、開板ハシタレドモ行ハズニ、ソノ板モ書林ノ蔵ニ埋レテアリシガ、彼本居ナルモノガ随筆ノ玉勝間、永々ト出定後語ヲ讃嘆シテ、(略)是ニヨリテ、彼平田篤胤、コノ出定後語ヲ取り出シ、ソノ涎ヲネブリ、漢文ヲ俗ニ通ジガタキヨリ、工夫ヲ転シテ、出定笑語ト題シテ、キワメテノ俗語ヲモテ仏法ヲ悪口シ弘メタルモノナリ。³¹⁾

上来列ネタル処ノ排仏ノ書類ノ中、或ハ大息シ、或ハ腸ヲ断ツベキモノハ、儒者ニアリテハ、出定後語ナリ³²⁾

ここでも、仲基は懷徳堂学主の三宅石庵(万年)から破門され、黄檗山の一切経に関わり糊口を凌いだという。その後、『出定後語』は開板されたが刊行されずに、埋もれていたという。また、『出定笑語』は「ソノ涎ヲネブリ」とは辛辣な批判となっている。

さらに平田篤胤については、次のように論ずる。

我真宗ヲ日蓮ト一ツ組ニシテ、神ノ敵也ト、ソノ悪口雑言、ミルニ忍ザル者也。然ルニ驚クベキコトハ、コノ平田ガ作ノ悪口雑言ガ大ニ名高キコト、ナリ、此頃仏法ヲ嫌フモノ、武士・医家ノタグヒ迄、ミナ求メテ喜デ読ムト申スコト也。実ニ大息スベキ此頃也。凡、古来排仏ノ書類モ世ニ多シトイヘドモ、此篤胤ノ作ノ如キモノ古来ナキコト也。³³⁾

篤胤は『出定笑語附録』(『神敵二宗論』)で、真宗と日蓮宗を論難している。

4. 結語

辻善之助の近世仏教墮落論に対する批判が起こり、今では近世仏教への再評価が進んでいる。また、司馬遼太郎がいう「仏教という夾雑物の多い思想」とは、神仏分離以前の江戸時代の信仰形態を想像せねばならない。日本の仏教思想を考察するに、神仏習合に注視しなくては、全体像は把握できないであろう。

また、仏教の護法論には二つある。一つには排仏論に直説反駁を加え、論破しようとするものである。もう一つは融合論を説くものである。儒仏、神仏、儒仏道、神儒仏の一致を説く四種類である。³⁴⁾ さて、『出定後語』に関連し種々の書物が現出したが、近代に至り仏教界からも、

仲基の研究法を踏襲し、その本質を理解し、近代仏教研究の方法論上の先駆となった、村上専精の『仏教統一論』(1890)³⁵⁾、『大乘仏説論批判』(1903)等がある。このように、仲基の学問的研究が仏教界で受容されるには、かなり時間を要したのである。

ここで西教寺の慧海潮音を挙げたのは、潮音を批判するのではなく、近世における仏教思想の一面をから、全体像を俯瞰することを望むからである。神儒仏が複雑に絡み合い展開した状況を確実に把握しなければ、近世仏教の実態に迫れないであろう。

参考文献

- 鷲尾順敬編集(1969)『日本思想闘争史料』(全10巻)名著刊行会
家永三郎編(1966)『日本古典文学体系 近世思想家文集』岩波書店
水田紀久・有坂隆道編(1973)『日本思想体系 富永仲基 山片蟠桃』岩波書店
柏原祐泉・藤井学編(1973)『日本思想体系 近世佛教の思想』岩波書店
中村幸彦編(1971)『日本の思想 安藤昌益・富永仲基・三浦梅園・石田梅岩・二宮尊徳・海保青陵集』筑摩書房
加藤周一編(1972)『日本の名著 富永仲基 石田梅岩』中央公論社
加藤周一(1977)『三題嘶』筑摩書房
同上 (1998)『富永仲基異聞－消えた版本』かもがわ出版
宮川康子(1998)『富永仲基と懷徳堂－思想史の前哨』ぺりかん社
同上 (2002)『自由学問都市大坂－懷徳堂と日本的理性の誕生』講談社
中沢護人・森数男(1970)『日本の開明思想』紀伊国屋新書
伊藤聡・吉田一彦編(2020)『日本宗教史3 宗教の融合と分離・衝突』吉川弘文館

注

- 1) 西教寺ホームページより。www.saikyoji.net 現在の住職は26世村松周雅(雅文)氏。
なお資料として、涅槃山西教寺編『涅槃山西教寺みほとけと美術』(2018)がある。2020年6月8日、西教寺を訪れ坊守に取材した。西教寺の典籍の中に『摺裂邪網編』草稿本がある。
- 2) 興津香織(2011)「西教寺慧海潮音－江戸後期の学問的交流と功績－」印度學仏教學研究第59巻第2号、p.763
本多高陽(1906)『近世高僧逸伝』(森江書店)によれば、「四谷に油問屋をして居る三河屋加藤長九郎といふ家の末子である」という。
- 3) 東大の赤門が有名だが、将軍家の娘を奥方に迎えた大名が建築する朱塗りの門。
- 4) 西教寺ホームページより。
- 5) 小川環樹編集(1971)『日本の名著 内藤湖南』所収「近世文学史論」、中央公論社、p.179
- 6) 司馬遼太郎(1993)『この国のかたち1』文春文庫、p.101
- 7) 加藤周一編集(1972)『日本の名著 富永仲基 石田梅岩』中央公論社 P.15 解説より
- 8) 同書、p.16 解説より

- 9) 富永家、父芳春の墓はあるが、仲基の墓は無い。現在は顕彰碑がある。仲基が夭逝したのは、仏教徒からすれば「仏罰」であり、墓も破却されたのではとも考えられる。
- 10) 加藤周一編集（1972）、前掲書、p.12
- 11) 柏原祐泉・藤井学編（1973）『日本思想体系 近世佛教の思想』岩波書店、解説を参照
- 12) 中村元監修（1962）『新・佛教辞典』誠信書房、P.115
- 13) 末木文美士（1997）『仏教思想』放送大学教育振興会、pp.40～41
- 14) 同書、p.46
- 15) 同書、p.47
- 16) 家永三郎編（1966）『日本古典文学体系 近世思想家文集』所収「翁の文」、岩波書店、p.554
- 17) 同書、pp.555～556
- 18) 同書、p.555
- 19) 小川環樹編集（1971）前掲書、「先哲の学問」所収 p.120
- 20) 同書、補注、p.434
- 21) 「螻蛄不知春秋」は『莊子』逍遙遊篇にある。なお「螻蛄春秋を知らず 伊虫あに朱陽の節を知らんや」は、親鸞の『教行信証』信巻の終わり近くにある言葉である。元々は中国の曇鸞の『浄土論註』にあった言葉である。
- 22) 鷲尾順敬編（1969）『日本思想闘諍史料』第3巻、p.240
鷲尾順敬が編纂した神儒仏耶の四教の関係交渉史の史料である。釈迦滅後、仏教の盛衰をあらわす正像末の三時説があるが、「闘諍」とは、五五百歳の最後の五百年である「闘諍堅固」（互いに自説に固執して相争うこと）に由来するものであろう。
- 23) 小川環樹編集（1971）前掲書、「先哲の学問」所収 p.106
- 24) 鷲尾順敬編（1969）同書、第三巻、P.269
- 25) 同書、p.270
- 26) 同書、p.280
- 27) 同書、p.284
- 28) 『本居宣長全集』第1巻（1968）、筑摩書房、p.244
- 29) 鷲尾順敬編『日本思想闘諍史料』第8巻、pp.94～95
- 30) 柏原祐泉・藤井学編（1973）前掲書、p.105
- 31) 同書、pp.112～113
- 32) 同書、pp.118～119
- 33) 同書、p.118
- 34) 同書、解説を参照
- 35) 『仏教統一論』を著したが一時、真宗大谷派の僧籍から還俗した。

（2020.9.7 受稿，2020.10.27 受理）